

駅から ぶらり旅

文＝伊藤哲也
写真＝亀卦川 英樹



世田谷の自宅でくつろぐ左川ちか。昭和五年、十年頃に撮られたものと思われる写真提供／市立小樽文学館。

な だらかに傾斜したブドウ畑の遠い先に、海がかすんでいた。余市町の登地区は、温暖な気候に恵まれた田園である。詩人の左川ちか※（一九二一―一九三六、本名川崎愛）は、余市町の祖父の果樹園で育った。小樽を拠点に観光案内をしている全国通訳案内士の荒木慶子さんは、熱心なちかの



◎ 第二一回 余市駅 小樽駅

ファン。荒木さんのガイドで、詩人の見たであろう風景の中を歩き出す。
中井観光農園は、一九二三年（大正十二）―ちかが十二歳の頃―ここに果樹園を開いた。今はリンゴ、サクランボ、ブドウなどを生産している。昨年はワイナリー「ドメーヌ・ミズキ・ナカイ」も作った。



「余市でブドウ農家がワイナリーを作るのは、初めてなんです」と、中井さん。息子の瑞葵（みずき）さんが仕込んだシードルや白ワインが、この秋以降にリリース予定。樹齢約80年のサクランボの木の前で。

四代目の中井淳さんは、「昔の登は現在より広範囲を指していたので、ちかの家はもう少し海に近かったかと思います」と言う。
丘陵地の果樹園を歩くと、ちかが最初に発表した詩の一つ「青い馬」

を思い出した。「転がる言葉と言葉がカラージュシシユールな世界を現出させる」（『左川ちか全集』の編者・島田龍氏）と評される通り、異質な光景がぶつかり合いながら一つの詩的世界が開ける。同時に、その原風景が故郷

青い馬
馬は山をかけ下りて発狂した。その日から彼女は青い食物をたべる。夏は女達の目や袖を青く染めると街の広場で楽しく廻転する。
テラスの客等はあんなにシガレットを吸ふのでブリキのやうな空は貴婦人の頭髮の輪を落書きしてゐる。悲しい記憶は手巾のやうに捨てようと思ふ。恋と悔恨とエナメル靴を忘れることが出来たら！私は二階から飛び降りずに済んだのだ。海が天にあがる。



※左川ちかのすべての詩、散文、書簡、翻訳を収録した『左川ちか全集 島田龍編』（書肆侃々房、2022年）を参考にしました。掲載の詩も同書によります。

記事の内容、表示金額は取材日（2024年4月17・18日）時点のものです。予告なく営業時間の変更や休業、商品の販売中止などの場合があります。ご利用の際は予めご確認ください。表記の金額は全て税込みです。

五月のリボン

窓の外で空気が大声で笑った
その多彩な舌のかげで
葉が群になつて吹いてゐる
私は考へることが出来ない
其処にはたれかゐるのだらうか
暗闇に手をのびすと
ただ 風の長い髪の毛があつた



リンゴの花芽が膨らんでいた
(中井観光農園)。

にあったと実感する。

ち

かは十二歳から十七歳まで、
庁立小樽高等女学校(小樽
桜陽高校の前身)に汽車で通った。
その頃、異父兄の川崎昇の親友・

伊藤整と知り合う。整は塩谷に住み、小樽高等商業学校(小樽商科大学の前身)の学生。二人は同じ汽車に乗り、小樽駅から途中まで一緒に通学路を歩いたかもしれない。思春期のちかは詩人を目指した整や昇の影響で、詩へ近づいていったのだろうか。

小樽運河が大正十二年に完成したことが示すように、小樽の経済は活況を呈していた。いま、小樽駅周辺を歩くと、昇の下宿先だった旧衣斐質店、その近くにある旧丸目白方支店などが目に入る。近代化に邁進する小樽の町は、詩人以前の詩人たちに、どんな印象を与えたのだろう。

今夜の宿は「石と鉄」。百五年前に建てられた本石造倉庫(小樽軟石だけで組まれ、木骨を用いない)をリノベーションした。一階がレストラン、二階が客室とリビングルームになっている。

店主の中源博幸さんは小樽育ち。飲食業の世界で腕を磨き、オーストラリアやシンガポールなど海外経験も豊富だ。「冬は宿泊者の七割が海外から、夏は七割が国内から

(右)石蔵の味わいを残す広々としたリビングルーム。冷蔵庫、食器、IH調理器などが揃っている。1人前2,800円でオードブルの注文もできる。ファミリー、グループでの利用に便利だ。(下)主寝室はベッドが2つ、2段ベッドが3つ(6ベッド)の部屋が隣にあり、最大8人が泊まれる。トイレ、シャワールーム付き。



でしようか」と言う。道産食材を中心に使った料理も評判で、この日の夜のコース料理を、小樽ビールや余市のワインとともに堪能した。

(下)豊西牛(帯広)のローストビーフ。うまみがぎゅっと詰まっている。コース料理(1人前4,000円)は、前日までの予約。この日は生ハムサラダ、地元のサクラマスのカルパッチョ、ローストビーフ、バゲット2種類(小樽地鶏のレバーパテ、ゴルゴンゾーラチーズ)、余市の北島豚のカツレツ、バエリア、デザートだった。



魚介類たっぷりのバエリアを持つ店主の中源さん。バエリアはコース料理のみに提供する。

倉庫の外壁に図の屋号が見えた。小樽市総合博物館の石川直章館長に尋ねると、「大正十四年の地図に川人商店の名前があり、小樽市史第三巻にも大正十一年頃の海産物商の一人として、『川人商店(塩乾魚)』とあります」と教えてくれた。当時はニシンを始めとする海産物の流通が盛んで、これもまた、ちかの小樽時代の建物だった。翌朝、市立小樽文学館を訪ねた。ここにはちかの写真や自筆原稿な



どが展示されている。学芸員の玉川薫さんは「昭和五十六年頃、余市の川崎家でちかの写真を複写させていただいた時には、昇さんが存命でした。ちかの記憶や彼女が残したものを大切にしていました」と、思い出を語ってくれた。

海の天使

揺籃はごんごん鳴つてある
しづきがまひあがり
羽毛を掻きむしつたやうだ
眠れるものの帰へりを待つ
音楽が明るい時刻を知らせる
私は大声をだし 訴へようとし
波はあとから消してしまふ
私は海へ捨てられた

ちかが通った大川尋常小学校
(現在の大川小学校)の近くの
海の光景。



「庁立小樽高等女学校は、今の菁園(せいえん)中学校の場所にありました」と、荒木さん(左)。それを示す碑には、校歌の一節も刻まれていた。荒木さんへのガイドの依頼はkakogami@gmail.com。



昇は小樽貯金局の職員で、整はよく昇の下宿(旧衣斐賃店の2階、写真左)に行っていた。その近くには旧丸ヨ白方支店(明治末期から昭和初期の建築)の洋風建築も残っている。



ここでは余市―小樽間の列車の窓外の風景動画も見られる。撮影は近年だが、ちかの散文詩「暗い夏」の中の「少女の頃の汽車通学。崖と崖の草叢や森林地帯が車内に入つて来る。両側の硝子に燃えうつる明緑の焰で私たちの眼球と手が真青に染まる。」という詩句の情景が蘇った。

昭和三年、十七歳のちかは関東大震災から立ち直り始めた東京へ向かった。昇の家に同居し、ジェイムズ・ジョイスやヴァージニア・ウルフの文章を翻訳してい

たが、十九歳の時から詩を発表するようになる。それは世界恐慌が日本に波及し、戦争へ傾斜していく中、カフェや銀ブラが流行する時代でもあった。

明と暗が交錯する東京で、都市と故郷のイメージの中を行き来しながら、ちかは徹底して「自分の世界」を追求したように感じられる。二十四歳で病に倒れたが、萩原朔太郎、西脇順三郎など、同時代の詩人から称賛され、惜しまれた。近年、作品集の出版や海外へ

の翻訳がなされている。

詩を自らの支柱として生きた左川ちかの作品を通して、小樽・余市の風景も新しい輝きを帯びるようだった。



パスタのランチセット。この日の前菜は野菜数種とマゾイのカルパッチョ、自家製鶏肉のハムなどの盛り合わせ、栗カボチャのスープ、ホッケとアンチョビのふきのとうソースのパスタ。ピザはホッケのコンフィと赤ワイン味噌ソースだった。

◎海と山の幸が味わえる 「Mare Blu (マーレ・ブルー)」

イタリアンレストランのシェフとして20年以上のキャリアがある大岩聖史(おおいわ・せいじ)さんが、2021年にオープンした。自ら釣りあげた魚介、農家直送の野菜などを使ったパスタやピザが味わえる。前菜、冷製スープとパスタ(またはピザ)、飲み物がセットになったランチ(1,815円〜)が人気。

●余市郡余市町黒川町4-106 ☎050・3559・8200。
11:00〜15:00(L.O.14:00)、17:00〜21:00(L.O.20:00)、
ディナーは前日までの予約制。